



研究力の向上が切り拓く地域の未来

研究力向上と地域イノベーション創出の好循環を目指して



水野 雅裕
理事 [総務・戦略企画担当]・副学長

佐藤 裕文
研究支援課研究支援専門職員

松本 康平
研究支援・産学連携センター
特任研究員・UA候補

ウィッタカー・トビー
研究支援・産学連携センター
特任研究員・UA候補

水野: 本日は「今、大学に求められる研究力向上とは」をテーマにお話したいと思います。人口減少や地域課題の多様化、社会の急速な変化が進む中で、大学には高度な人材育成だけでなく、新たな知見や技術を生み出し、地域や社会の発展に貢献する役割がこれまで以上に求められています。岩手大学が地域に根差した知の拠点として、地域課題の解決や新たな価値創造に貢献していくためには、質の高い研究成果を継続的に生み出していくことが不可欠です。このような背景から、岩手大学では研究力向上を重要なテーマとして位置付け、研究環境の充実や研究支援体制の強化に取り組んでいます。研究力を高めていくためには、研究者自身の探究心や創造性はもちろん、それを支える環境づくりや組織的な支援体制が重要になります。研究者個人の努力だけでは補いきれない部分を、大学としてどのように支えていくかが大きな課題です。

本日は、長年にわたり研究支援や産学官連携に携わってきた佐藤専門職員と、現在研修を通じて研究支

援を学んでいるUA※候補者のウィッタカーさん、松本さんを交え、それぞれの立場から研究力向上の意義や課題、そして岩手大学が目指す方向性について意見を交わしたいと思います。

※UA (University Administrator) の略称。大学経営を戦略的に支える高度専門職

今、大学に求められる研究力の上とは

水野: まず佐藤さんにお伺いします。

これまで長く産学官連携や研究支援に携わってこられました。大学に求められる役割は以前と比べてどのように変化してきたと感じていますか。

佐藤: 大学に求められる役割は、以前と比べて大きく広がってきたと感じています。従来の教育・研究に加え、産学官連携を通じた社会課題の解決や地域イノベーションの創出など、「知を社会に生かす」役割が

強く求められるようになりました。その一方で、研究の現場では研究者に求められる業務も多様化しています。研究資金獲得のための情報収集や申請書作成、採択後のプロジェクトマネジメントなど、研究以外の業務負担は年々増加しており、研究活動に充てられる時間の確保が大きな課題になっています。

また、産学連携の在り方も大きく変化しています。以前は研究者個人と企業担当者との関係を基盤に、共同研究やライセンスを通じて研究成果を社会実装するケースが中心でした。しかし現在は、大学と企業だけでなく、自治体や金融機関、支援機関など多様なステークホルダーが連携しながら、複雑な社会課題の解決を目指す共創型へと移行しています。地域連携においても、人材不足や人材育成、AI・DX、カーボンニュートラルへの対応など、大学に寄せられる期待は技術課題の解決や新製品開発にとどまらず、ますます広がっています。一方で、大学には優れた研究成果や技術シーズが数多く存在するものの、それらが十分に社会価値や事業化へ結び付いていないと限りません。そのため大学には、「知を生み出すこと」に加え、「知を社会価値へつなげること」がこれまで以上に求められていると感じています。

水野：研究者を取り巻く環境が大きく変化する中で、大学には研究者を支える体制づくりや、産業界、金融機関、自治体など多様な主体と連携しながら社会課題の解決に取り組むことが求められているということですね。

それでは佐藤さんは、地域や社会の発展に大学がより大きく貢献していくために、研究力をどのように向上させ、地域社会との結び付きをどのように深めていくことが重要だと考えていますか。

佐藤：大学には優れた研究成果や技術シーズがありますが、それがそのまま社会の価値に繋がるわけではありません。大学の目的は本来、真理の探究であり、事業化を目的とする企業とは目的が異なります。研究室で成果が出たものを社会実装に繋げるためには、

再現性の確保、スケールアップ、実証試験、コストや経済性の検証など、多くの課題を乗り越えなければなりません。大学の研究成果を実社会や市場に届けるまでに立ちはだかる障壁として、産学連携の分野では「魔の川」「死の谷」「ダーウィンの海」と表現される壁があります。特に地方大学において、それらを越えるために必要な人材、情報、資金などのリソースを十分に確保することは容易ではありません。そのため重要なのは、研究成果そのものだけではなく、研究や社会実装を支える仕組みや体制を整備することです。研究成果や地域課題解決に教員だけで取り組むのではなく、それを支える研究マネジメント人材を育成・確保するとともに、地域の産業支援機関や自治体と一体となった支援体制を構築していく必要があると考えています。

水野：それでは、今年の春に新たに岩手大学へ着任されたUAのお二人にお伺いします。

着任前、大学を取り巻く環境や地域からの期待についてどのような印象を持っていましたか。また、実際に着任してみて感じたことや印象の変化についてお聞かせください。



ウィッタカー：私は今年の3月まで海外に住んでおり、日本の大学を卒業したわけではないため、着任前は日本の大学や地方大学の姿を具体的にイメージすることが難しい部分がありました。ただ、地方における若者の流出や人口減少が進む中で、大学の人材育成が重要な役割を担っていることは認識していまし

た。また、この職に応募する際に岩手大学について調べる中で、さまざまな新しい取組に挑戦している大学だという印象を持ちました。実際に着任してみると、想像していた以上に地域との関わりが深いことに驚きました。既に企業訪問や産学官連携の現場に参加する機会があり、大学が地域の中で非常に重要な役割を果たしていることを肌で感じています。一方で、研究者、そして大学には研究以外にも多くの役割が求められており、研究時間の確保が難しい現実も見えてきました。地域や社会から寄せられる期待の大きさと、それに応えようとする大学側の挑戦の両面を今まさに目の当たりにしています。



水野：ありがとうございます。松本さんはいかがでしょうか。

松本：漠然としたイメージでしたが、大学を取り巻く環境について、運営費交付金が削減されるなかで、競争的資金を獲得しながら研究力を維持・向上させていかなければならないとか、教育や研究だけではなく、地域貢献という役割も大きく担っており、自治体や地域社会が抱える課題解決にも取り組まれているなど感じていました。

以前所属していた大学でも、地域課題の解決や地域産業の活性化に研究シーズを活用する取組を目にしましたが、岩手大学では、それ以上に地域との結び付きの強さを感じています。生み出された知をどのように社会へ還元していくか、そして地域の中核大学が地域の持続性をどのように支えていくかが重

要なテーマなのだと実感しています。

水野：大学に対する地域からの期待の大きさ、そしてその期待に応えていくための仕組みづくりの重要性についてお話いただきました。ここからは、そうした課題への対応として取り組んでいる「I-waRP」についてお話を伺いたいと思います。

地域の知と資源を結ぶ I-waRP

水野：研究成果を地域の価値創造や課題解決につなげていくためには、大学だけでなく、企業や自治体、支援機関など、多様な主体を結び付ける仕組みや人材が欠かせません。

そうした課題への対応として、昨年12月に「いわてイノベーション推進リサーチパーク（I-waRP）」が設置されました。また、新たな専門職であるUAの配置も進められています。

まずは佐藤さん、I-waRPの設置に至った背景や目的、そして大学と地域社会をつなぐ上で期待される役割についてお聞かせください。

佐藤：I-waRPは、一言で言えば、「研究成果を社会価値へとつなげる地域イノベーションエコシステム」です。

近年、地域企業や社会が大学に求める役割は大きく変化しています。人材不足や人材育成、DX・GXへの対応、産業構造の転換など、複数の課題が複雑に絡み合う社会課題への対応が求められるようになりました。こうした課題は、一つの企業や一つの大学だけで解決することが難しく、さまざまな主体が連携しながら取り組むことが必要になっています。大学には優れた研究成果がありますが、それを社会実装につなげるためには、人材や資金、事業化ノウハウ、実証環境などが不可欠です。しかし、地方大学が単独でそれらを十分に備えることは容易ではありません。そこで岩手大学を核として、岩手県、盛岡市、岩手県工業技術センター、いわて産業振興センターなどが持

つりソースを結集し、研究から事業化、さらには地域産業の振興までを一貫して支援するエリアネットワーク型リサーチパークとして、I-waRP を構想しました。企業にとっては、技術相談から研究者とのマッチング、補助金活用、研究開発、知的財産の活用、実証、事業化までをワンストップで利用できることが大きな価値になります。また、その取組の中核を担うのが「岩手コーディネート・ネットワーク」です。大学や自治体、公設試験研究機関、産業支援機関の専門人材が組織の枠を越えて連携し、企業ニーズの発掘からプロジェクト形成までを伴走支援します。課題が複雑化する中では、人と人、シーズとニーズを結び付け、新たな価値創造をプロデュースする人材の存在がこれまで以上に重要になっています。さらに、I-waRP は地域貢献だけを目的とした取組ではありません。社会実装を通じて新たな研究課題や大型共同研究を生み出し、外部資金や優秀な人材を呼び込み、その成果を再び研究へ投資することで研究力の向上につなげることも重要な目的です。

地域に分散する知、情報、人材、設備をネットワーク化し、研究力向上と地域イノベーション創出の好循環を生み出すこと。それが I-waRP の大きな特徴であり、目指す姿です。



水野：I-waRP が研究成果を社会につなげるための地域全体のプラットフォームであることがよく分かりました。それではウィッタカーさんと松本さんに伺います。I-waRP という新たな枠組みにどのような魅力や可能性を感じていますか。また、この取組が研究者や地域にとってどのようなメリットをもたらすと

考えていますか。

ウィッタカー：I-waRP の魅力は、大学の研究成果を社会へ届けるだけでなく、地域から新たな研究課題やニーズを大学へ持ち帰ることができる点にあると思っています。研究者にとっては、自らの研究成果を社会へ還元する機会になるだけでなく、企業や地域が実際に抱えている課題やニーズを知ることができます。そうした課題やニーズを知ることによって、新たな研究テーマや研究の発想につながる可能性があります。また、近年は競争的資金においても、社会的ニーズとの関連性が重視される傾向があります。そのため、地域や企業のニーズを把握することは、研究開発を進めるうえでも大きな価値があると思います。一方で、企業の方々とお話ししていると、「大学と連携したい」「研究者と話してみたい」という思いがあっても、誰に相談すればよいのか分からないという声をよく聞きます。また、共同研究まで至らなくても、まずは大学と関わってみたいという企業も少なくありません。そうした企業にとって、気軽に相談できる入口になるという点も I-waRP の大きな価値だと思います。大学と地域との距離を縮めることで、連携のハードルを下げるができる。そして、人材不足という共通課題を抱える地域において、より効率的なマッチングや協力関係の構築につながるのではないのでしょうか。そうした意味でも、今後の展開に大きな期待を持っています。

水野：ありがとうございます。松本さんはいかがでしょう。

松本：私が考える I-waRP の最大の魅力は、岩手県内に分散している大学、研究機関、行政、企業、産業支援機関などを組織の壁を越えて結び付けることで、地域全体を一つのイノベーション拠点として機能させようとしている点です。さらに、「岩手コーディネート・ネットワーク」を通じて、企業の課題に応じた研究者、設備、資金、人材、事業化支援などをワンストップで組み合わせることができます。

課題発見から共同研究、さらには社会実装までを地域全体で支援することができる。その点が非常に大きな特徴だと思います。

同様の取組を考えると、多くの場合は研究機関や企業を一つの場所に集積することが特徴になっています。対して、I-waRP は、県内各地に分散している研究設備や人材を組織や距離の壁を越えてネットワーク化し、岩手県全体を一つのリサーチパークとして機能させようとしている点が特徴的です。

その中で、岩手大学は研究シーズと地域企業のニーズを結び付けるハブとしての役割を果たすことができ、これは地域と密接に関わってきた岩手大学だからこそ発揮できる強みだと考えています。



水野：お二人のお話から、I-waRP には大学と地域の双方に新しい価値を生み出す可能性があることが伝わってきました。

それでは続いて、「研究と社会をつなぐUA」という専門職についてお話を伺いたと思います。

研究と社会をつなぐ 新たな専門職UA

水野：I-waRP という仕組みを機能させるためには、人と人、組織と組織を結び付けながら、研究成果の社会実装を支えていく専門人材が欠かせません。その役割を担う存在として、新たに岩手大学で配置が進められているのが「ユニバーシティ・アドミニストレータ」、いわゆる新たな専門職「UA」です。

そこで佐藤さんに伺います。UA導入の背景や狙い、また教員や事務職員とは異なる専門職としてどのよ

うな役割を担うことが期待されているのでしょうか。

佐藤：岩手大学では、I-waRP や岩手コーディネート・ネットワークの取組を通じて、研究と社会をつなぐ専門人材の育成と活躍の場づくりを進めています。特に令和7年度には、文部科学省の「研究開発マネジメント人材に関する体制整備事業」の体制強化機関に採択されました。この事業では、研究IR機能や戦略企画機能、知財ガバナンス機能の強化を進めるとともに、本学の研究力向上と社会実装力の強化を担うUAの育成プログラムや人事制度の構築を進めています。UAには、教員が持つ優れた研究シーズを育てながら、地域や産業界のニーズを的確に把握し、それらを結び付けて共同研究や大型プロジェクトを企画・推進する役割を期待しています。しかし、その目的は単なる社会実装支援ではありません。まず重要なのは、研究者が挑戦的で質の高い研究に取り組める環境を整えることです。新たな研究領域の創出や大型外部資金の獲得、学際的・国際的な研究ネットワークの形成を支援し、大学の研究力そのものを高めていく必要があります。

その上で、生み出された研究成果を社会課題や地域産業のニーズと結び付け、共同研究や事業化、スタートアップ創出へと発展させていく。そして、その過程で得られた知見や人材、資金が再び大学へ還流し、新たな研究力向上につながっていく。

つまり、UAは研究成果を社会へ橋渡しするだけでなく、研究力向上と地域イノベーション創出の好循環を生み出すハブとしての役割を担うものとなります。岩手大学が目指しているのは、研究を起点として社会価値を創出し、その成果を再び研究へ還元する「知・人材・資金」の好循環を生み出すことで、UA、研究開発マネジメント人材に期待される最も重要な役割だと考えています。

水野：ありがとうございます。UAは単なる研究支援者ではなく、研究力向上と地域イノベーション創出を両立させる重要な存在なのですね。それでは、ウィ

ウィッターさんと松本さんにお伺いします。まず、お二人がU Aを志したきっかけと、岩手大学に魅力を感じた理由についてお聞かせください。

ウィッター：私は今年の3月まで研究支援の仕事に携わっていました。さまざまな研究者や研究プロジェクトと関わる中で、とても知的で魅力的な仕事だと感じていました。そのため、同様の仕事を日本でも続けたいと考えていた中で、岩手大学の募集を知りました。印象的だったのは研究支援だけではなく、I-waRP を通じた産学官連携にも取り組めるという点です。

正直に言うと、産学官連携について経験がない分野で、不安もありました。しかし、組織的にU Aを育成しようとする岩手大学の支援体制を見る中で、新たな挑戦をしてみたいという気持ちが強くなりました。また、面接などを通じて多くの職員の方々とお話する機会があり、率直に「ここで働きたい」と感じる事ができたことも大きな理由です。

水野：ご自身の経験をどのように岩手大学で活かしていきたいと考えていますか。



ウィッター：前職では、大規模な研究プロジェクトのマネジメントや研究資金申請に関する業務に携わっていましたので、そうした経験を、岩手大学の研究支援業務や研究者のプロジェクト推進支援に活かしていきたいと考えています。また、海外での経験もありますので、地域との連携だけでなく、将来的には岩手大学や地域企業を国内外の研究機関や研究者と結び付ける役割も担えればと思っています。私は外部

から岩手へ来た立場ですが、だからこそ見える魅力や可能性もあります。岩手の強みや岩手大学の研究の魅力をより広い世界へ発信していくことにも挑戦したいと考えています。

水野：ありがとうございます。ウィッターさんの国際的な経験や視点は、今後の岩手大学にとって大きな財産になると思います。それでは現在、どのような業務に取り組んでいますか。



ウィッター：現在は研修を中心に取り組んでいるところです。まずは大学の仕組みや制度を学び、岩手大学と地域について理解を深めることを大切にしています。具体的には教員の研究内容を調べたり、企業訪問や産学官連携の現場に参加したりしています。また、研究支援業務の一環として、研究成果の発信や研究紹介にも関わらせていただいています。まずは岩手大学と岩手という地域を深く理解し、その上で自分がどのような価値を提供できるかを考えていきたいと思っています。

水野：ありがとうございます。それでは続いて、松本さんにお伺いします。U Aを志した理由、そして岩手大学に感じた魅力について教えてください。

松本：大学および大学院で研究活動を行う中で、研究そのものだけではなく、研究者を支援し、研究成果を社会へつなげる仕事に強く関心を持つようになりました。研究活動を行う中で、自身の研究が、多くの支援者や関係者の下支えによって成り立っていること

を実感してきました。その経験から、自分も研究を支える側として関わりたいと考えるようになりました。特に、研究者と関わりながら研究の発展を支援するリサーチアドミニストレーションの仕事には以前から魅力を感じており、それがUAを志した大きな理由です。私は研究大学を中心にきてきたこともあり、これまで大学の研究と地域との関わりを強く意識する機会はそれほど多くありませんでした。しかし、岩手大学は、地域との距離が非常に近く、大学の研究成果を地域課題の解決や産業振興へ直接つなげようとしている姿勢に大きな魅力を感じました。特に I-waRP のように、大学だけでなく自治体や企業、産業支援機関が一体となって地域イノベーションを創出しようとしている点は非常に印象的に映りました。

水野：ご自身の経験はどのように活かしていきたいと考えていますか。

松本：これまで研究者として活動してきた経験は大きな強みになると思っています。研究を立案し、データを収集・分析し、成果として発信するという一連のプロセスを経験しているからこそ、研究者の視点に立った支援ができると考えています。また、研究者として培った視点を活かしながら、研究者と企業、地域社会を結び付ける橋渡し役になりたいと思っています。



水野：現在はどのような業務に取り組んでいますか。

松本：現在は研究力分析や外部資金獲得支援に関す

る業務を中心に取り組むほか、研究推進に関する情報収集や分析などにも携わっています。今後は研究支援だけにとどまらず、研究成果を地域課題の解決や社会実装につなげる役割にも積極的に取り組みたいと考えています。

水野：研究者としての経験を持ちながら支援できることは、松本さんならではの強みですね。それでは最後に、佐藤さんからUAへの期待についてお聞かせください。

佐藤：お二人には、それぞれのバックグラウンドや経験を活かしながら、教員の研究力を最大限に発揮できるパートナーになってほしいと思っています。また、企業や自治体、支援機関をつなぐ「共創のプロデューサー」として、研究力向上と地域イノベーション創出を両立させる役割も期待しています。

将来的には、岩手大学だからこそ生み出せる研究領域の発展に貢献するとともに、その成果を社会へつなげ、さらに社会から得られた知見や人材、資金を大学へ還流させる。そうした好循環を生み出す中核人材として成長していただきたいと考えています。

水野：教員の研究力を最大限に引き出すパートナーとして、そして地域や企業との共創についての期待を受け、お二人は地域企業との連携にどのように貢献していきたいと考えていますか。また、着任して間もない立場だからこそ見えてくる本学の伸びしろや、今後挑戦してみたいテーマについても、ぜひお聞かせください。

ウィッターカー：まずは、先生方にとってプラスになる産学連携に取り組んでいきたいと考えています。私の名字は岩手ではあまり見かけないものですが、私自身のことを知っていただき、「研究支援のことなら気軽に相談できる相手だ」と思ってください。大切だと思っています。そのためにも、先生方だけでなく、地域企業の皆さまのもとにも積極的に足を運

び、対話を重ねながら信頼関係を築いていきたいと思っています。将来的には、地域を巻き込んだプロジェクトの実現や、岩手大学の研究と国内外の研究機関・企業との新たなつながりづくりに貢献できればと考えています。

また、海外での経験や異なる文化的背景を持つ立場だからこそ見える視点もあると思っています。地域の中では当たり前と感じられている研究でも、外部の視点から見ると大きな強みや可能性を持っている場合があります。そうした埋もれている価値を見出し、新たな連携や発信につなげていくことも、自分の役割の一つだと考えています。

松本：私は、岩手大学が持つ優れた研究シーズと、地域企業が抱える課題やニーズを結び付ける橋渡し役として貢献したいと考えています。共同研究の推進はもちろん、そのための外部資金の獲得や、その先の社会実装まで一貫して伴走していくことが重要だと考えています。岩手大学には優れた研究成果や研究者が数多く存在しており、さらに地域との強固なネットワークもあります。そうした強みを分野や組織の枠を越えて結び付けることで、さらに大きな価値を生み出せる余地があると感じています。

特に I-waRP のような仕組みを活用することで、大学と地域企業との連携はさらに広がっていくと思いますし、そこには大きな可能性があると考えています。また、今後は地域企業との対話を重ねる中で見えてくる課題を起点に、分野横断型のプロジェクトにも積極的に挑戦していきたいと考えています。さまざまな専門分野や組織をつなぎながら、地域企業が抱える課題の解決や新たな価値創出に貢献していきたいと思っています。

さらに、そうした取組を通じて、研究力の向上にもつなげていきたいと考えています。



地域とともに創る未来のイノベーション

—地域に貢献する大学から、地域の未来を創る大学へ—

水野：最後に、皆さんが描く将来像について伺いたいと思います。I-waRP やU Aの取組が定着し、研究と地域をつなぐ仕組みが十分に機能するようになったとき、岩手大学や地域社会にはどのような変化が生まれているとお考えでしょうか。それぞれの立場から期待する未来像をお聞かせください。まずは佐藤さんからお願いいたします。

佐藤：私は、I-waRP やU Aの取組が定着した先に、岩手大学が持つ特徴的で強みのある研究力を基盤として、地域とともに新たな価値を生み出し続ける「地域イノベーション拠点」となっている姿を思い描いています。U Aが研究と社会をつなぎ、研究成果の社会実装を促進することで、そこから得られた知見や人材、資金が再び研究へと還元される。そのような好循環が生まれることで、企業の成長や新たな産業の創出にもつながり、大学と企業、地域がともに発展するイノベーションエコシステムが形成されていくと考えています。

そうした岩手発の地域共創モデルを全国に示していくことが、私の期待する未来です。



ウィッターカー：私は、I-waRP の取組を通じて、岩手大学が地域の新しいエネルギーを生み出す中心的な存在になってほしいと期待しています。さまざまなバックグラウンドを持つ人たちがつながり、そこから新しい研究や産学連携、社会実装などにつながっていく。そのような未来の実現に、私自身も貢献したいと考えています。また、若手研究者や学生にとって、岩手大学が学びやすいだけでなく、多くの刺激を受けながら成長できる場所であってほしいと思います。岩手だけでなく、国内外の多様な人や価値観に触れながら、自分の可能性を広げていける環境になることを期待しています。

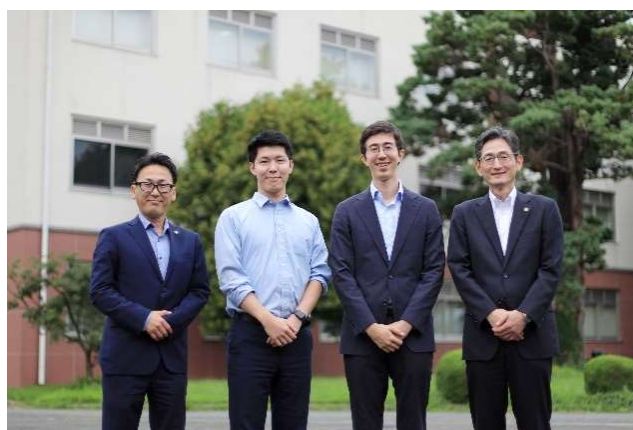
松本：私はUAとして、研究者と企業、自治体、地域をつなぐ橋渡し役となり、研究成果を地域課題の解決や新たな価値の創出につなげていきたいと考えています。将来的には、岩手大学を中心として、地域の中でさまざまな挑戦が生まれ、その挑戦を支える仕組みづくりに貢献したいと思っています。大学には優れた研究成果や研究者、人材、設備があります。それらを有効に活用しながら、新しい価値の創出につなげていきたいと考えています。

また、研究者や学生にとっては、自由な発想のもとで挑戦できる環境が何よりも重要です。その挑戦を大学だけで支えるのではなく、地域や企業、自治体も含めて応援し、ともに育んでいける地域であってほしいと思っています。さらに、岩手での研究や学びが地域の枠にとどまることなく、国内外へと広がり、多様

な人や組織とつながっていく環境が実現すればよいと考えています。

水野：ありがとうございます。本日のお話を通じて、研究力向上の取組は決して大学のためだけのものではなく、地域の未来につながる重要な取組であることを改めて実感しました。ウィッターカーさん、松本さんには、これからさらに多くの経験を積みながら、研究者に寄り添い、地域との架け橋となる存在として活躍していただくことを期待しています。

岩手大学はこれからも、地域に頼られ、尊敬され、愛される大学として、地域とともに新たな価値を創造し続けてまいります。そして、研究力の向上と地域との共創を両輪として、持続可能な地域社会の発展に貢献してまいります。本日はありがとうございました。





「いわてイノベーション推進リサーチパーク (I-waRP:アイ・ワープ)」とは

「いわてイノベーション推進リサーチパーク(I-waRP)」は、岩手大学を中心に、岩手県、盛岡市、いわて産業振興センター、岩手県工業技術センターが集い、「知、人材、情報、資金」といったイノベーションリソースが集積するエリアネットワーク型の拠点です。地域全体の知と資源を結集し、基礎研究から社会実装、新事業創出までを切れ目なく強力にサポート。岩手から世界へ、イノベーションで未来を拓きます。

